

「絵画の手と手」を記録する

近 藤 恵 介

The Hand and Hand of the Painting

Keisuke KONDO

佐賀大学芸術地域デザイン学部研究論文集 第7巻第1号
JOURNAL OF THE FACULTY OF ART and REGIONAL DESIGN
SAGA UNIVERSITY
VOLUME 7, NUMBER 1
June 2023

「絵画の手と手」を記録する

近藤 恵 介*

The Hand and Hand of the Painting

Keisuke KONDO

要 旨

本稿は2022年10月28日～11月27日の期間に東京都渋谷区にある LOKO GALLERY において開催した個展「絵画の手と手」の記録である。

「絵画の手と手」展は私にとって、2020年3月に東京都渋谷区にある MA2 Gallery での個展「卓上の絵画—3度目の春」以来の個展である。しかしながら、2017年8月から続く連続展「卓上の絵画¹」



「絵画の手と手」展キービジュアル① 撮影：近藤恵介

* 佐賀大学芸術地域デザイン学部芸術表現コース

Course of Fine Arts, Faculty of Art and Regional Design, Saga University

¹ 明治～昭和の画家・鏑木清方（1878～1972）が1925年（大正14）頃に提唱した「卓上芸術」を端緒とする近藤恵介による連続展。4回の展覧会を軸とするこの試みは絵画制作、発表を主としつつも、印刷物の作成、他者との制作や対話、文章の執筆など多岐にわたる。

の最後に位置する「3度目の春」展は、当時流行の兆しをみせていた新型コロナウイルス感染症の影響による緊急事態宣言の発出を受け、会期半ばで中止となった。そのため「絵画の手と手」展では同連続展で扱った主題を引き継ぐことになった。「絵画の手と手」展は、連続展「卓上の絵画」の延長線上にあるといえる。

タイトルの解説、ステートメントの再読、記録写真の紹介、作品データの整理などを通して「絵画の手と手」展を振り返りつつ、新たな作品制作へと繋げることを目的とする。

展覧会

近藤恵介 絵画の手と手

会期：2022年10月28日（金）—11月27日（日）

会場：LOKO GALLERY



「絵画の手と手」展キービジュアル② 撮影：近藤恵介

展覧会タイトル

本展には「絵画の手と手」という、やや変わったタイトルが付されている。展覧会タイトルを考える際、言葉に過剰に意味をもたせ過ぎると、作品の内容を縛ることになるため、ある程度ラフに構える必要がある。私の場合、展覧会を開催することが決まってから、メモのような素描を描きながら構想を練り、取材をし、ある程度イメージが蓄積されてくると、作品制作をスタートさせる。作品が少しずつできてくると、そのありように倣ってタイトルを決めることが多く、結果的にそのタイトルがその後に制作される作品の方向性を規定することがしばしばある。つまり、作品制作と展覧会タイトルの関係には抜き差しならぬものがある。

私の近年の作品は、本紙を表装したり、パネルに張り込んだりしない「まくり」のままで展示すること

が多く、次の状態への移行を予感させることから、絵が手を伸ばしているイメージを想起したことが「絵画の手」のきっかけになっている。そうやって絵画から伸ばされた手をさまざまな仕方——「あの手この手」で、現実の空間と関係させる手つきをこそ見せたいと考え、「絵画の手と手」とした。

ステートメント

展覧会の始まるひと月ほど前にステートメントを書いた。文章は3つのパラグラフに分かれ、それぞれに見出しが付いている。断章形式を選択したのは、ひと繋がり文章にすることで、文章がその内部において因果関係を築き、それ自体として完結することを避けるためである。展覧会場に設置されるそれぞれの絵画作品が自立性をもちつつも、その場所においては作品同士が一時的なネットワークを築くようなあり方を想定した。急いで付け加えるならば、書いていたらそうなった、という側面もある。

絵画の手と手 近藤恵介 (2022年9月22日)

古径の遅筆

筆記具をもって紙に線を引く。線は手の動く方向に延びてゆき、運動の軌跡として紙の上に残されるので、一般的にリニアな時間を想像させる。

明治～昭和の日本画家・小林古径は遅筆で知られ、多くのエピソードが残る。古径とも親交のあった哲学者の谷川徹三は「小林古径という四字を書くのに、五分はたっぷりかかったろう。或いは十分位かかったかも知れない²」と懐古している。実際に試してみればわかることだが、それだけの時間をかけて遅筆するのはとても難しいし、かなりの辛抱強さがある。

古径の画室に招かれ、制作の様子を目にした弟子の村田泥牛は、一枚の木の葉に緑青を塗るときのあまりの遅筆の遅さから、息苦しさにたまらなくなり、部屋を飛び出したという。

古径はこの時間に生きた。引かれた線から身体性を伴ったリニアな時間は読みとれず、どこか所在のなさを湛えている。

この手

遅く描くことは身体に相当な負荷を与える。同じ姿勢を保つのだって疲れるし、五分でも、十分でも、描かれつつある図像や文字を見ていたらゲシュタルトは崩壊する。筆をもつ手だっていま何を描いているのか忘れてしまうだろう。描きながらにして、いま、その瞬間筆を動かす画家の主体性はバラバラになり散逸するが、すでに画面に引かれている線や描かれた形が画家を新しく形作る。つまりその極めて遅い遅筆の間に、画家は以前の画家ではなくなっている。遅筆に負荷をかけることで初めてそれは起こるわけで、身体性に任せて気持ちよく線を引っぱっているだけでは古径のような線は引けない。令和のいま、その時間を生きている人はそうそういないだろうし、というより古径が生きた時代にだって自分の名前を数分かけて書く人なんていなかったはずで、だからこそ逸話として残されている。だからすごい、とまづはいえる。

古径は理想とする飛鳥天平時代の線を指して「ぬきさしならぬ線³」と表現したが、自身の画家としての主体性を遅く描くことによって解体し、線の側に主導権を渡すことで、時空間を貫く無時間的な線を引くことを試みた。

そうか、この手があったか！

² 谷川徹三「思い出すこと」『小林古径画集』5分冊中之第5冊、中央公論美術出版、1961年（昭和36）、4頁

³ 小林古径「東洋画の線」『小林古径展』東京国立近代美術館、2005年（平成17）、219頁における『美術新論』1933年（昭和8）3月の引用

仮張り

紙のシワを伸ばしたり、紙にテンションをかけて絵を描きやすい状態にするために、接着力の弱い糊で一時的に紙を張り込むことを「仮張り」という。「仮」であるということは、いずれ別の状態に移行することが予感されている。絵が完成したら仮張りから剥がし、パネルに張り込んだり、表装するなどして画面を安定した状態にしておくのだが、仮張りの、あるいは仮張りから剥がしたままのペラの「まくり」には別の接続可能性が、のりしろのように紙片（絵画）を囲んでいる。

絵画が手を差し出すので、こちらもその手を握ってみる。握手をするとき、そのひとときの手と手の触れあいには、すぐに離されることが含まれている。

作品

(凡例)

作品名 制作年 サイズ (縦×横) 素材・技法

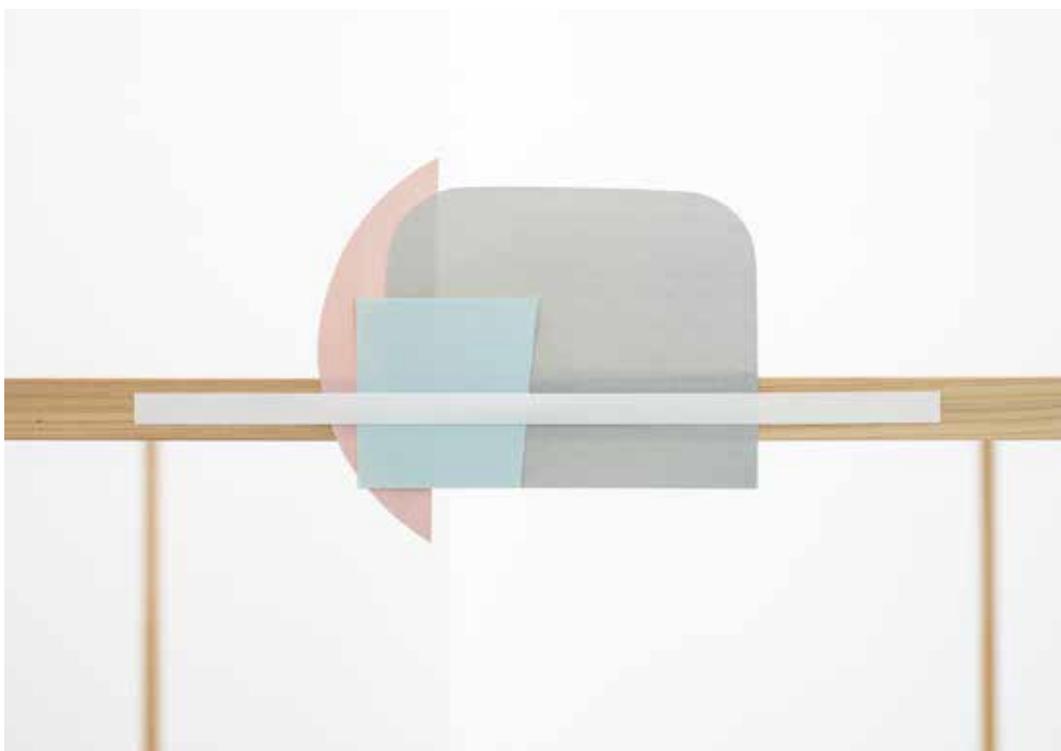
撮影：柳場大

1階
ジャングルジム

ひとときの絵画

左：2020 45.5×37.7cm 染料、絹

右：2022 45.3×28.6cm 岩絵具、水干、膠、墨、雅邦紙、糊 *小林古径《瓶》の模写（部分）



ひとときの絵画 2022 左から：12.3×3.7cm、6×5.7cm、9.6×11.6cm 岩絵具、水干、膠、墨、鳥の子紙



ハンカチ 2021 9.8×20.8cm (畳んだ状態) 墨、絹



紙片 2022 29×13cm 岩絵具、膠、鳥の子紙



紙片 2022 14.7×25.1cm 岩絵具、膠、鳥の子紙



ひとときの絵画 2022 上から：13.5×11cm、11.5×18.8cm 岩絵具、水干、膠、墨、鳥の子紙

1階
壁面



私とその状況（絵画の手と手） 2022 53×106cm（2点組） 各53×53cm
岩絵具、水干、膠、墨、パネルに鳥の子紙、コラージュ、糊



ひとときの絵画
左：2022 15.3×14.1cm 墨、朱、膠、雅邦紙
*安田靉彦《法華寺「阿弥陀三尊及童子像」より 模写》の模写
右：2022 29×21.1cm 金箔、膠、薄美濃紙



ハンカチ 2021 22.4×20cm (畳んだ状態) 染料、絹

階段



お面 2022 11×28.15cm
岩絵具、胡粉、膠、墨、鳥の子紙、糊

2
階



ひとときの絵画

上 (紙本) : 2022 6.1×7.1cm 金箔、膠、薄美濃

下 (写真) : 2022 8.9×11.8cm インクジェットプリント



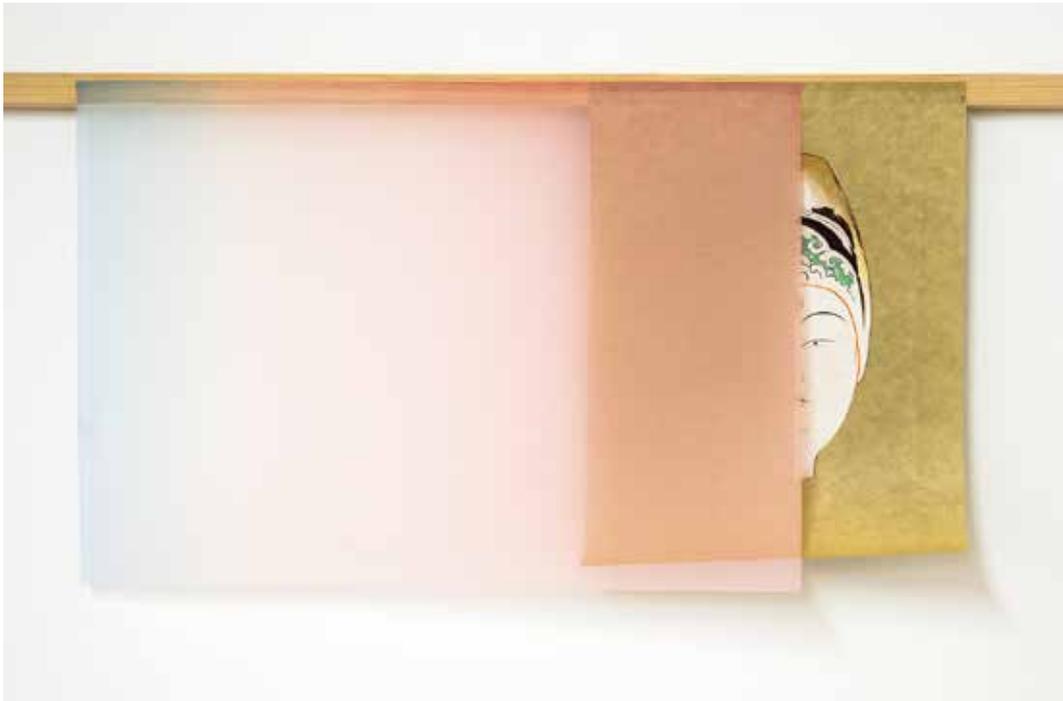
ひとときの絵画 2022 10×7cm 墨、雅邦紙



ひとときの絵画

上：2022 15.6×28.1cm 岩絵具、膠、鳥の子紙

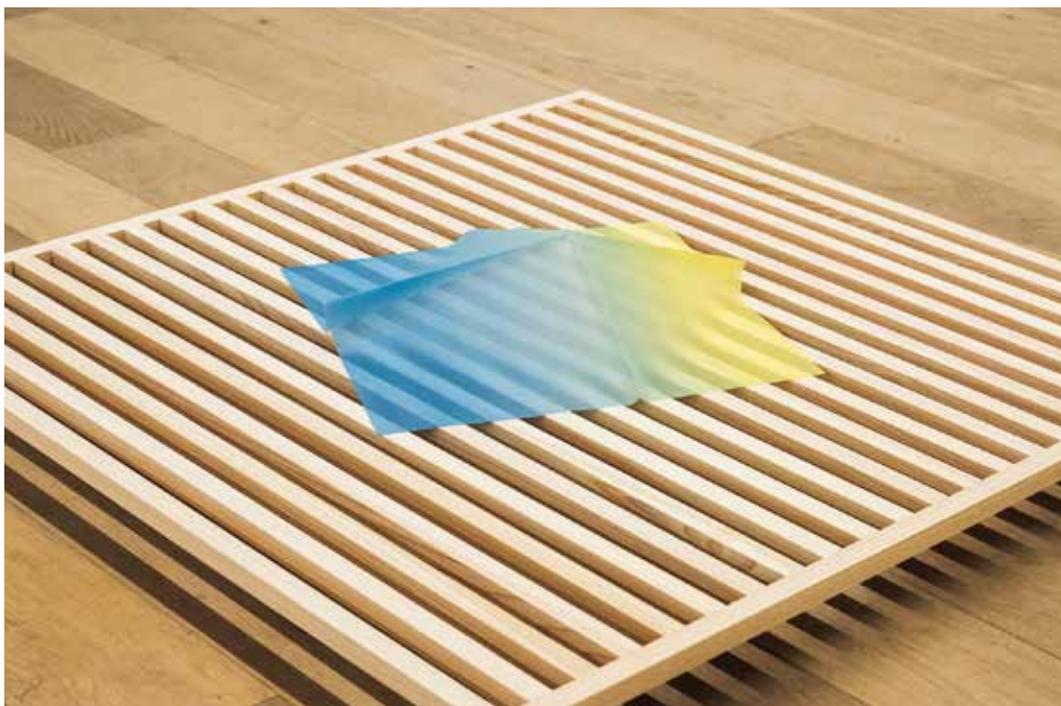
下：2022 17×26cm 水干、膠、墨、鳥の子紙 *安田靉彦《風来山人》の引用



ひとときの絵画

左：2021 31.9×45.2cm 染料、膠、絹

右：2021 32×23.4cm 岩絵具、水干、膠、墨、雅邦紙 *小林古径《俑頭》の模写（部分）



ハンカチ 2021 39.9×39.9cm (広げた状態) 染料、絹

地階



私とその状況 2018 53×53cm 岩絵具、水干、膠、墨、金箔、パネルに鳥の子紙

展示風景







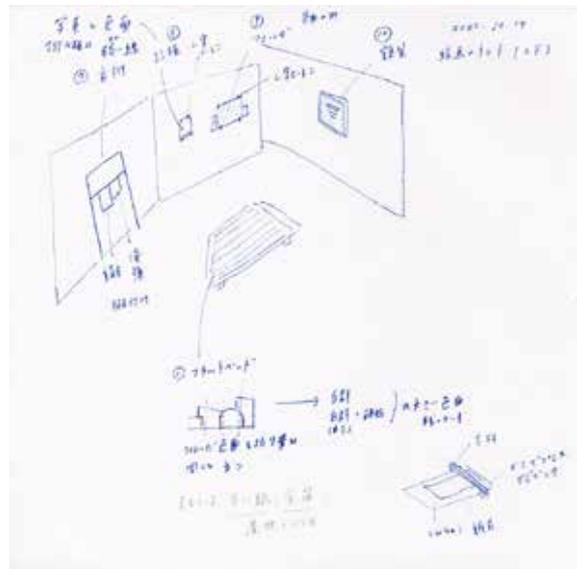
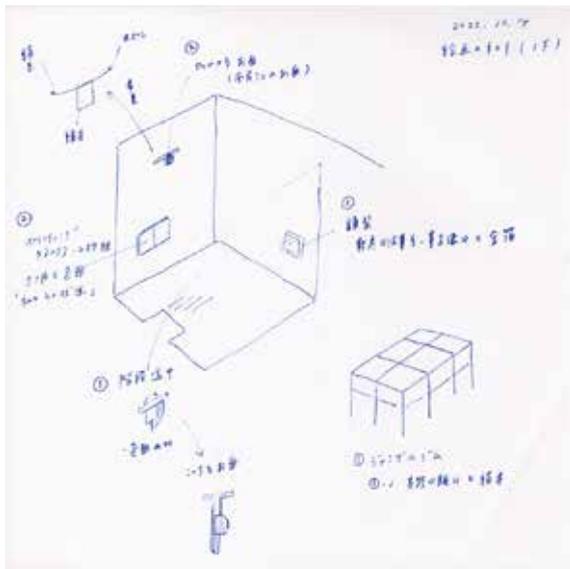
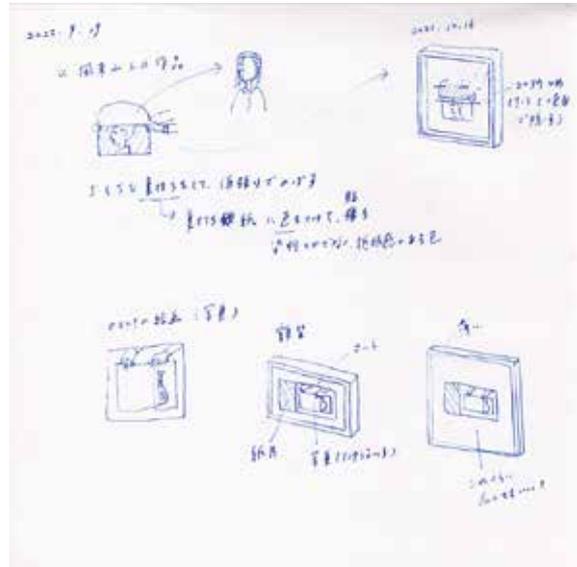
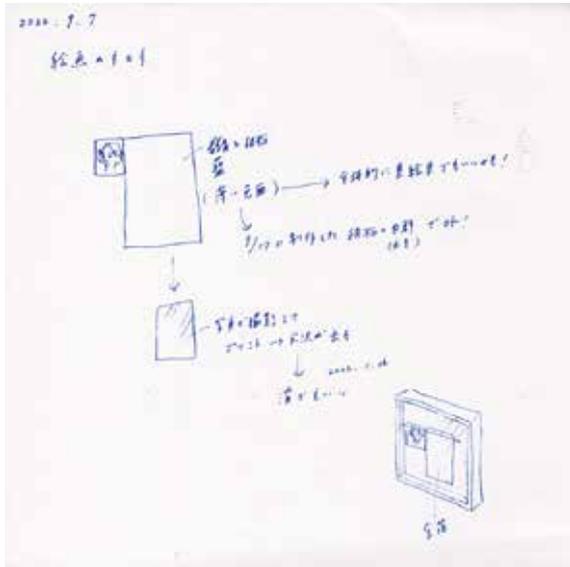


制作メモ

サイズ：各19.4×19.4cm

描画材：PILOT PUPER プチ（細）

使用紙：ダンデレード CoC (70g /㎡)



左上から右下へ：2022年9月7日、9月19日、10月14日、10月14日

会期中イベント

会期中には2つのイベントを開催した。

勉強会「絵画に手をのばす、遅く話す」では、ゲストに石川卓磨氏（美術家・美術批評家）と佐藤美子氏（川崎市市民ミュージアム 学芸室長）を招き、一般の参加者とともに、本展で扱っている、主に日本画の問題について検討した。

もう一方は小説家・古川日出男氏との読書会「古川日出男、長篇詩『天音』譚」である。会期中の11月22日に発売となった古川氏にとって初めての長篇詩『天音』の装幀画を近藤が担当したことから、また、古川氏とはLOKO GALLERYにおいて継続的に展覧会を開催していることから、急遽イベントを実施する運びとなった。イベントの前半は階層に別れたギャラリー空間を利用し、2人がそれぞれ参加者と『天音』に関する対話をした。後半は公開制作に移行し、対話のなかで話された内容を古川氏が数種類の紙に書き付け、その紙を近藤が支持体の杉板に生麩糊で貼り重ねた。完成した作品は、2人の手で展覧会場に設置された。

勉強会「絵画に手をのばす、遅く話す」

鼎談：近藤恵介、石川卓磨（美術家・美術批評家）、佐藤美子（川崎市市民ミュージアム 学芸室長）

日時：2022年11月3日（木・祝）14:30-16:30

会場：LOKO GALLERY



左から：石川卓磨、佐藤美子、近藤恵介

読書会「古川日出男、長篇詩『天音』譚」

対話・制作：近藤恵介、古川日出男

日時：2022年11月26日（土） 17:00-19:00

会場：LOKO GALLERY / zenta coffee B1F&1F



公開制作中の古川日出男の手元 撮影：かくたみほ



公開制作で作った作品は会場に設置された 撮影：かくたみほ

近藤恵介インタビュー

HD デジタル、カラー、サウンド、11分34秒

撮影・編集：遠藤和夫（LOKO GALLERY）

公開日：2022年11月17日

web サイト：

<https://lokogallery.com/archives/exhibitions/kondokeisuke-hands>（アクセス 2023年 4月16日）



映像スチル

おわりに

展覧会を振り返ることは果たして有益であろうか。ひとたび展覧会が始まってしまうと、作家のすることは多くはなく、また、その頃には次の作品の着想を得ているため、開催中の展覧会にそれほど意識が向かない。それどころか、すでに次の制作の準備を始めている。この「おわりに」を書いている現在（2023年4月16日）は「絵画の手と手」展の開催から半年ほどが経過しているため、その後に幾らかの新作を作っている。つまり、振り返りとは、以前の思考への揺り戻しである。

そうやって改めて出会った自作はすでに他者であり、振り返る過程で見出したのは、本展において実現しなかった、これらの作品のまた別のあり方であった。それなりに長く絵を描いてきて得た実感であるが、制作中の作品の状態とは非常に不安定なものであり、制作の最中においては作品の完成などといった予感すら微塵もなく、ただ運動のみがそこにはある。しかしながら、ひとたび展覧会が始まり、記録写真が撮られ、いずれ展覧会が終わる頃には、不思議とそれぞれの作品が随分前から存在していたような必然性を獲得することがしばしばある。作品が安定した状態に移行しようとするのであれば、作者がすべきことは、すぐさまその別のあり方を実現することではなかろうか。新しく手を差し出す必要がある。

なお、本展を通してなされた研究の一部は、JSPS 科研費（課題番号：21K00213）の助成を受けている。